

国際文化学、そして文化を考え直す

— 2011 年 3 月 11 日以後

A Post-March 11 Reflection upon Intercultural Studies and Culture

HIRANO Kenichiro

平 野 健一郎

概 要

2011 年 3 月 11 日に東日本を襲った大地震・大津波と福島第一原発の崩壊、すなわち 3.11 は、10 年前にアメリカで起こった 9.11 と並んで、国際文化学に根本的なインパクトを与える。3.11 大震災と福島第一原発の事故は日本文化の問題としても考えなければならないが、それよりもっと本質的なところに、人間・文化と自然の関係をどうするかという問題がある。文化とは人間が自然の中で生きるために作り出すものであるから、まさに人間と自然の関係そのものにほかならない。1755 年のリスボン大震災は、18 世紀後半～19 世紀のヨーロッパに近代文化の繁栄をもたらすきっかけとなったともいわれるが、その背後には、「自然から文化へ」というルソー流の人間観があった。21 世紀の今、原発をどうするかという問題は、国際文化学の見直しも含めて、根本的なところで文化を考え直すことをわれわれに求めている。3.11 は世界中の人々が文化と自然の関係を考え直すきっかけになるであろう。

キーワード：国際文化学、3.11、大津波、原発、自然と文化、リスボン大震災（1755 年）、オスロ事件、重層的多文化主義

Abstract

The colossal earthquake-tsunami and the accompanying collapse of the Fukushima First Nuclear Power Plant that hit East Japan on March 11, 2011 which are to be memorialized as March 11th in history, together with September 11th that occurred in the United States ten years earlier, inflict a fundamental impact onto intercultural studies. While we are required to investigate the March 11 incidents of the earthquake-tsunami and the Fukushima plant catastrophe as questions of Japanese culture, we know that further below to the fundamental level, there is the question of how we relate culture and humanity to nature. Since culture is what human beings create in order to live within nature, it is nothing but the relationship between humanity and nature. It is said that the big Lisbon earthquake-tsunami in 1755 led to the flourishing of Europe-centered modern culture in the latter-half of the 18th century and the 19th century. The historic changes were supported by the Rousseauesque interpretation of humanity developing from the state of nature to that of culture. Now, in the 21st century, the question of what we should do with

the nuclear power plant demands us to rethink culture, and ipso facto intercultural studies as well, in a fundamental manner. March 11th will be the landmark for people all over the world to reflect upon the relationship of culture to nature.

Keywords : intercultural studies, March 11, 2011, great tsunami, nuclear power plant catastrophe, nature vs. culture, Lisbon disaster (1755), Oslo incident, multi-[layered] culturalism

9.11、3.11 と国際文化学

日本国際文化学会が成立したのは龍谷大学国際文化学部においてであり、2001年11月のことであった。奇しくもそれはアメリカでの同時テロ、9.11の直後であった。創立総会に集まった誰もが、新しい学問分野としての国際文化学に大きな学問的使命が課されていると感じたのであった。それから10年、2011年の3月11日、東日本大震災が襲い、福島第一原発の事故が起こり、その日は「3.11」として人類の歴史に永久に刻まれる日となった。さらに、7月22日、23日には中国で高速鉄道の事故が起こり、オスロで若者がたくさん若者の命を奪うという事件が起こった。われわれ国際文化学に携わる者は、今や、国際文化学を、そして文化そのものを9.11のときよりもさらに深く考え直す必要があるであろう。9.11、3.11、そしてこの鉄道事故やオスロの事件は、すべて文化の問題として国際文化学で考えることができるし、そういう問題として深く考えなければいけないと考えるのである。

国際文化学にとっての原発問題

現実の問題と関わる国際文化学は、まず第一に、原発をどうするかという問題に直面している。われわれは、今、原発はやはり必要だという考え方と、原発をやめるべきだという考え方の対立の中にある。原発事故の直後には、私は、一つの案として、世界中の原発を北極と南極に移転して国際的に集中してしまっただろうかと考えた。日本のような先進社会の原発の存廃よりも、これから発展していかなければならない途上国社会のエネルギー不足はますます大きくなるであろうか

ら、それらの社会が原発なしでやっていけるかどうかという問題の方が世界全体の問題となる。先進国は代替エネルギーに転換したとしても、発展途上国には原発を置いておくことになれば、原発事故の危険性はいっそう増し、先進国の無責任さは消えないどころか増えるであろう。そこで、世界のすべての原発を人間無住の地に集め、国際的な技術・知識・知恵を結集して安全運転・安全管理を徹底し、海底送電線を世界中に張り巡らせて送電すれば、人類全体の安全をはかりながら世界中のエネルギー問題を改善することができる。そのためには、全原発の安全運転と平等な送電を保障する国際システムを新しく生み出さなければならぬが、そこに国際文化学の国際性を生かすことが求められることになるであろう、と。

この発想の根底には、「このようなときこそわれわれには大きな発想の転換が必要ではないか」という思いがある。エネルギー問題は人類全体の問題であるから、3月11日以後の福島第一原発のあの事故をきっかけにして、エネルギー問題を国際的・全地球的に考えて新しい解決に向かっていくという発想で、具体的には、原発を北極・南極に集中してはどうかなどと、無謀な提案を考えついたのである。そのときは原発の怖ろしさをまだ十分には知らなかったのである。地球の1ヶ所に集中された原発の一つに「想定外の」事態が起これば、国際的な制圧ができないうちに、地球全体の破壊になり、人類の絶滅になるであろう。エネルギーの問題は人類全体の問題として考えなければならないが、原発を地球のどこかに集中するというような解決ではなく、原発そのものを人類全体の問題として考え直す方向に進まなければならないであろう。実際に、福島第一原発の4基の原発の破裂をきっかけに、世界中で原発を考え直す動きが始まっている。それがわれわれに必要な

発想の転換である。この発想の転換を進めるためにも、3.11あるいは福島第一原発の崩壊がなぜ起こったのかを考えることが必要であろう。その後、これからどうするかを考え、議論することが必要である。

原発事故の原因：日本文化の問題、国際文化の問題、人類文化の問題

3.11と福島第一原発の崩壊が「なぜ、起こったのか」ということについては、まず日本文化の問題としてこれを捉えることが可能である。3.11の自然災害（「天災」）については、日本列島が地震列島であり、地震の多くに津波が続くという根本が突きつけられた。それに対してわれわれがどのように備えてきて、どのように対処したか、という問題が明らかになった。福島第一原発事故に破滅的に表れた「人災」についても、すでにいろいろな問題が指摘されているが、一つの捉え方として、福島第一原発の原子炉の文化的特徴を問題にする捉え方がある。福島第一原発の原子炉は、（日本のほかの原子炉のほとんどと同じく）もともと東京電力がアメリカの企業であるジェネラル・エレクトリック（GE）社という会社から買って、それを福島という日本の風土の中に設置したものである。アメリカではハリケーンが自然災害として想定され、原子炉はそれに応じた設計になっている。日本、しかも海岸線上の土地であれば、本来、台風だけでなく、地震と津波を想定して設計し直すはずであった。そうすることが、それぞれの地域の文化に即した文化受容であったはずである。ところが、ジェネラル・エレクトリック社から設計変更を拒否された東電は、唯々諾々とそれにしたがって、アメリカ仕様の原発を日本の、海岸線上に造ったということである。これは二重の意味で日本文化の問題であった。本当は設計し直されて然るべきだったというのが一つである。外来文化をそのまま受け入れればよいか、という国際文化問題である。そして、設計変更をしなかったという行動には、もう一つ、アメリカ（＝強い者）に追従の日本人の行動様式だという点がある。原発事故が「なぜ、起こったのか」という問題については、そのほかにも日本文化の問題として考えられる点が数え切れないほどある。

二番目には、「なぜ、起こったのか」という問いを国際的な文化の問題として考える必要がある。これは、先述の「エネルギーは全人類に必要」という問題を具体的に展開することにもなるであろう。とりわけ、今の人類全体の発展段階という観点からいえば、これからますます発展するであろう発展途上社会の人々にはどうしてもエネルギーがますます必要になるという状況があるという事実である。これは、国際的な文化のあり方の現状が細分化され、不均等であるところに原因があると考えることになり、具体的には、事故が起こる前に原発を全体として規制するということなどがほとんど行えていなかった理由もそこにあるということになる。

三番目は、人類全体の文化の問題として「なぜ、起こったのだろうか」と考えるということである。3.11以後の現在では、世界的にそのことが行われるようになっていっていると思われる。私自身は、6月に、短時間であるが、被災地の岩手県大槌町を訪れることができた。被災後の状況を直接目にして、さまざまな思いと考えが浮かんだが、なんといっても、自然の猛威、自然の力の凄さを感じざるをえなかった。すでにかなり整理されてはいたが、あちらこちらに瓦礫の山が圧倒的な存在を見せつけている。そこに一人ひとりの、一軒一軒の生活があったものが、すべて「瓦礫」と化している。一人ひとりがそこで生活を送り、生を営んでいたということは、それが文化にほかならなかった。それを自然が一瞬にして無いものにした。無いものにしたどころか、それだけのがらくたにしてしまう、その力の凄まじさに圧倒されるほかはなかった。あれだけの瓦礫が、2011年3月11日午後2時46分までは、すべて、それぞれの生の営みの場所にこまかく収められ、かけがえのないものとして愛しまれていたに違いないのであるが、もはやその状態に戻すことができようとは思われなかった。豊かな生活、豊かな文化であればあるほど、それが破壊されると、より大量の瓦礫と化し、始末のしようがないものになるのだと思われた。人間の文化というものはそのようなものであり、自然はそれをいとも簡単に無用ながらくたにしてしまうことができるのであろうか。

自然と文化

1755年にリスボンを襲った地震と津波の大震災は、18世紀後半以降のヨーロッパ社会の大きな思想的変動のきっかけになったといわれている。イマニュエル・カントに当時最先端の地球論があるのは、リスボン大震災に触発されたからであるとされる。その意味では、国際社会論にとって聖典ともいべきカント「永遠平和のために」(1795年)もリスボン大震災の産物であるといえるかもしれない。ちなみに、世界平和思想史上、カントの「永遠平和のために」の前段階とされるジャン＝ジャック・ルソーの「サン・ピエール神父のヨーロッパ永久平和草案要約」がまとめられたのは、リスボン大震災の翌年、1756年である。

大震災直後のリスボンの市街を描いた図版は、3.11後の東北の被災地にも似た、瓦礫と炎と避難所の光景を伝えている。そのリスボン大震災を文字で記録に残しているのがヴォルテールの「カンディド」である。この作品は18世紀思想小説の代表作といわれるが、主人公であるウェストファリアの貴公子カンディドが男爵令嬢キュネゴンドを追い求めて南米パラグアイやエルドラードなどまでを遍歴するという荒唐無稽な筋立てである。その旅の初めの方で、カンディドはリスボン湾で時化に遭い、散々な思いでリスボンに上陸した途端に大地震に遭うのである。ペストと性病が蔓延する大地と海は「肉体的な悪と精神的な悪」に覆われていた。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、人々は現実肯定的な哲学論議を繰り返し、しぶとく生き続けるのであった。そして、ヴォルテール死去の直後、現実のヨーロッパ世界は、旧支配層の腐敗と汚辱に満ちた社会の中から、虐げられていた人々が市民権を獲得するフランス革命を迎えたのである。

レヴィ＝ストロースは、ルソーの「人間不平等起源論」をフランス語文献のなかで最初に一般人類学を述べたものだという。すなわち、「ほとんど現代のことばで、自然から文化への移行という人類学の中心問題を提出」したのがルソーのこの論文であったと評価するのである。ルソーがその「人間不平等起源論」を発表したのは1754年、つ

まり、リスボン大震災の前年であった。いいかえれば、「自然から文化へ」という人間理解がリスボン大震災という自然の脅威を越えて、産業と科学・技術のヨーロッパ近代、世界近代を牽引し始めたと考えることができるのである。

2011年の東日本大震災も、今後のわれわれの考え方や努力の如何によって新しい人類史を作るきっかけになるかもしれない。それを期待したい、否、今やそれを期待する以外にないということであろう。大槌町で私が見た光景をそのままに言えば、やはり自然は文化に対してもの凄い猛威を振るうものということである。文化を作り、生を営む人間の企てを全部壊してしまう、一瞬にして壊してしまう、そういう力があるということである。にもかかわらず人間はそういう自然の中で生を続けていくということであるとすれば、論点は、結局、自然と人間の関係に帰着する。ヴォルテールは、生き続けることに翻弄されたカンディドの「だが、庭を、耕さなければいけない」ということばで「カンディド」を結んでいる。「カンディド」解説者の多くがこの最後のメッセージに注目する。これが3.11後のわれわれにも向けられたものであるとすると、これはどういうメッセージであろうか。

「庭を耕す」ということは、自然を征服することか、もしくは自然に戻るということか。あるいは、もう少し中間的に、自然となんとかつき合うということか。自然とどのようにつき合うか、その方法にもまた文化の違いがあるであろうが、それよりももっと本質的なところに、人間と自然の関係をどうするかという問題がある。文化とは人間が自然の中で生きるために作り出すものであるから、まさに人間と自然の関係そのものにほかならない。このようにして、文化の本質のレベルに戻って文化を考えなおすこと、文化を新しく考えることが、2011年3月11日をきっかけに求められることになったのではないであろうか。

どう生きるか

吉村昭『三陸海岸大津波』は怖るべき予言に満ちた記録文学作品である。明治29年に三陸海岸一帯を襲った大津波は今回の津波の規模に迫るも

のであった。作家はその津波を経験した古老二人の話を書きとめ、その後も繰り返し三陸を襲った津波を乗り越えてきた人々の証言を記した。作家は、各所に築かれた10メートルの防潮堤を、人々の津波との戦いの一つの到達点と評価しつつ、大津波はその防潮堤も越すに違いないと述べた。そして、最後に、明治29年の大津波以来、いくつもの大津波を経験した古老の一人の、「津波は、時世が変わってもなくなる、必ず今後も襲ってくる。しかし、今の人たちは色々な方法で十分に警戒しているから、死ぬ人はめったにないと思う」ということばを記し、「この言葉は、すさまじい幾つかの津波を体験してきた人のものだけに重みがある」と評した。3.11を知るわれわれは、三陸の大津波をもっとも深く追体験した作家の、この謎めいた評価をどう受け止めればよいのであろうか。いずれにせよ、3.11の前にこの世を去った作家は、三陸海岸の風景の中に、津波と戦いながら生きてきた人々を見続けようとしていた。

文化とは人間と自然の関係であるというところまで下りて行く必要があることを、一つの句から再認識することができる。「かぶとむし地球を損なわずに歩く」(宇多喜代子)。人間は自然と対峙することによって、「地球を損なわずに歩く」ことをやめてしまい、地球を損ないながらずっと歩いて来た。あるいは、歩く以上のことをしてきた。恐竜も、繁栄し、個体数を膨らました結果、地球を冷却化し、絶滅したと考えられるという説にしたがえば、単純に人間と人間以外の動物は違うとはいえないが、人間の場合、地球を損なって歩くことが、要するに、人間は文化を作り続けるということである。文化を、そして極度に発達させた文化である文明を作り続けることによって生き続けるのが人間の宿命となっている。それをこれからどうするかを考える場合にも、文化は人間と自然の関係であるということを基本にせざるをえないであろう。自然と共生すれば、それでよいのであろうか。

3.11後のあの凄まじい風景を見ると、それも人間の甘えではないかと思われるほどに、大きく、深い問題をわれわれは今、抱えていると思われるが、その上でもわれわれはこれからどうする

かということである。まずは、やはり東北地方の地域一つひとつの復興の努力をすることになる。二番目には、原発事故が同時に発生したので、われわれは日本全体のエネルギーの問題をどうするかを考えはじめている。三番目に、これが今度の3.11の大きな特徴であるが、原発事故が東北地方の地域復興のレベルと日本のエネルギー問題の新しい状況のレベルを越えて、国際的な、あるいは人類的な課題として世界中で取り上げられ、考えられているということである。ドイツでは、メルケル首相が一挙に考え方を変えるなど、反原発・脱原発に大きく転換した。福島第一原発の事故が全人類的な問題として考えられていることの一例である。原発の問題、原発をどうするかという問題は、国際文化学の見直しも含めて、根本的なところで文化を考え直すことをわれわれに求めていると思われる。3.11は世界中の人々が文化と自然の関係を考え直すきっかけになるであろう。

多文化主義を越える

最後に、直接国際文化学に関する中間レベルに戻って、7月22日にオスロで起こった事件を考えてみたい。32歳のノルウェー人男性、アンネシュ・ブレイビクはなぜあのように残虐なことをしたのであろうか。彼は周到に準備し、事前に自分で説明する準備もして、多数の若者を殺す犯行を行なった。報道によれば、彼はノルウェー社会が移民を受け入れることに危機感を覚えており、犯行は、その移民の多くがイスラム系だと考え、原理主義的なキリスト教徒としてイスラムとの闘いを呼びかける行為であった。彼は、彼自身の言葉で「文化的マルクス主義と闘わなければならない」といったと伝えられている。「文化的マルクス主義と闘う」とはどういうことであろうか。彼自身が言い直しているところによれば、現代のヨーロッパ社会の政策的な課題は資本主義と社会主義の闘いではなくて、愛国主義と国際主義の闘いであるということであるから、「文化的マルクス主義」とは「国際主義」であり、国際主義とは、言い換えれば、多文化主義のことである。今のところ、これが彼の考えであると理解してよく、こ

れが彼の行為の本質的なメッセージではないかと考えられる。私は、ある意味で彼がいうところは当たっていると考える。

ブレイビクが提出している問題、これもやはり文化をどう捉えるかという問題にほかならない。彼は多文化主義に対抗する政治的立場をとったが、そうした狭い立場を超えたところでいえば、あのような事件はやはり文化の問題として捉えるべきだといえるであろう。実は、おそらくわれわれ多くの者の中にも愛国主義的な思いと国際主義的な思いとが同居し、拮抗しているか争っているのではないであろうか。つまり、自分が何によって生きているか、あるいは、何をアイデンティティの源としているかを絶えずまざぐっているのではないだろうか。その場合、安易に行くと、「やはり日本人だ」という一言に帰着してしまいそうになり、それではいけないと思い、もっと国際主義的に考え、行動すべきだと思い直す、という葛藤を繰り返す。曖昧な多様性よりもすっきりとした単一性をよしとしがちかもしれない。もう一点、ブレイビクがいつていると伝えられることで注目されるのは、愛国主義に傾く彼の考え方の中で日本と韓国が理想化されているということである。彼は、日本と韓国は多文化主義を拒否している国であり、反移民・非多文化社会の模範であると捉えているという。これは、少し低い次元で国際文化学の問題である。韓国や日本の社会がノルウェーの若者にそのように見えている、一つのステレオタイプが依然として残っているという問題でもある。ブレイビクは多様性よりも単一性を求めるが、それがノルウェーの現在の社会では実現困難であるために、あのような政治的なテロ行為に出たと解釈される。

私自身は私なりに国際文化論を構想してきたが、その企てをブレイビクの言葉を借りて言い換えれば、愛国主義と国際主義を両立させるために、二つをどのように組み合わせるかを考え続けてきたということになる。キリスト教文化とイスラム文化が、ノルウェーの現実の社会の中で、A対Bという形で対抗していると考えれば、ブレイビクのように、キリスト教文化にとって危機的な状況だと捉えることになるのはやむをえないと思う。限られた空間と時間の同一平面上で

どちらを選ぶか、どちらを自分のアイデンティティの基にするかという選択として問題を捉えれば、これはどちらかを選ぶ（もう一つを排除する）ほかないという考え方にならざるをえない。そうではなく、単一の平面だけで考えるのではなく、Aという文化が存在する平面の上に、今度はAという文化もBという文化も、さらにC、D、E、・・・という文化も存在する、より大きな平面があるというように、文化の存在する次元を縦に重ねて考える。複数の文化が横にぶつかり合うという関係ではなくて、文化の存在する次元を縦に重ね合わせて、重層的に構造化することによって、文化と国際文化を考えるべきであろうと考える。そうする以外に、愛国主義対国際主義の葛藤を乗り越えることはおそらくできないのではないかと、以前から考えてきた。すなわち、国際文化学は多文化主義の立場に立たなければならないが、国際文化学に求められる多文化主義は、平面的なそれではなく、重層的なそれであると思われる。

3.11 以後の国際文化学

3.11 以後の世界の中で、たとえば、より直接的に「国際文化学的な」7月22日の事件に直面して、すべての文化現象をより深いところで、すなわちより国際文化学的な考え方で考え直さなければならないことを感じさせられる。「より国際文化学的な考え方」とは、一人の人間の生にまつわるこまごました事柄から人類全体の生存という大きな事柄までのすべてを、かけがえのない文化として考える、重層的な考え方である。

3.11によって、文化を「自然（＝環境）と文化」という根源的な次元に立ち戻って再考することになったとすれば、それは、一人の人間の生き方としての文化から、小さな地方の文化、国の文化、大きな地域の文化、そして人類全体にとっての文化までを、同時に、重ね合わせて考え直すということである。しかも、人類全体にとっての文化を考えるということは、一人の人間の生き方としての文化を考えるということにほかならない。オスロ事件に関して、多文化主義を平面的に捉えるのではなく、重層的に捉えることを提唱するの

も、同様に、文化を重層的に見るという提案である。

すべての人が、3.11 やオスロの事件を越えて、なお人間として生きなければならないことはいうまでもない。自分だけではなく、すべての人が生を全うするように力を合わせなければならない。力を合わせることができれば、すべての人が生を全うすることができるという希望を持つことができる。オスロの若者たちはあの悲劇を乗り越えて、悲劇を生んだ政治から逃避するのではなく、むしろ政治にもっともっとコミットしていくとい

う考え方を明確に述べ、行動に移し始めてもいると伝えられる。政治へのコミットメントとは、つまり、個人の全体への積極的な参加である。そうすることによって、今われわれが直面している、あるいはグローバルな社会が直面しているアイデンティティ問題、多文化主義の問題に取り組んでいこうとしているといえよう。社会の構造と文化を重層的に捉えようとする捉え方に希望を持つことができ、その意味で、国際文化学に期待がかけられると考えるのである。